

平成 28 (2016) 年度 奨励研究

地域資源を活用したまちづくりに関する研究  
—今金町フットパスの活用方策について—

事業報告書 (概要版)

札幌国際大学

## 1. 研究の目的

平成 27 年度、地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町をフィールドとして、フットパスモデルコースの設計・検証を行ない、地域観光振興のツールとしてフットパスの可能性についての共同研究を行った。前年度は、町内に 4 コースを設計するとともに、フットパスマップの作成に取り組んだ。また、町民へのコース紹介や体験会の開催も行った。

平成 28 年度は、こうした前年度の研究成果を踏まえ、今金町においてフットパスプログラムを取り入れたモニターツアーを実施し、成果と課題を明らかにするとともに、同町のフットパスコースの今後の活用方策について検討する。また、今年度は、学生を 4 チームに分け、学部学科の有する学びの専門性を生かしモニターツアーの企画・運営等に参画させることとした。

## 2. 研究組織

本研究は、以下の者が担当する。

(代表) スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 教授 佐久間 章  
観光学部観光ビジネス学科 教授 丹治 和典  
観光学部観光ビジネス学科 准教授 千葉 里美  
スポーツ人間学部スポーツ指導学科 准教授 新井 貢  
短期大学部幼児教育保育学科 准教授 朝地 信介  
非常勤講師（健康運動指導士） 本多 理紗

## 3. 推進体制及び役割

本研究は、今金町と札幌国際大学の共同研究であることから、それぞれ以下の推進体制により、役割を分担し研究を進める。

### (1) 札幌国際大学

総括：スポーツビジネス学科 佐久間章

《ツアーチーム》 観光ビジネス学科教員 2 名（丹治和典・千葉里美）  
観光ビジネス学科学生 4 名

- ・ ツアープログラムの作成 ・案内しおり等の作成
- ・ ツアーの添乗 ほか

《サインチーム》 短期大学部幼児教育保育学科教員 1 名（朝地信介）  
心理学科子ども心理専攻学生 4 名

- ・ コースサインのデザイン検討 ・サイン看板の作成

《指導チーム》 スポーツ指導学科教員 1 名（新井貢）  
非常勤講師 1 名（本多理紗）

スポーツ指導学科学生 7 名

スポーツビジネス学科学生 4 名

- ・ フットパスコースサインの設置位置及び表示内容の検討
- ・ フットパスコースの所要時間及び注意個所のチェック

- ・唾液アミラーゼによるストレス度チェック
- ・ノルディックポールを使った歩き方の指導
- ・フットパスコースサインの設置、回収

《写真チーム》 スポーツビジネス学科教員 1 名（佐久間章）  
 観光ビジネス学科学生 2 名  
 心理学科子ども心理専攻学生 1 名 ※学生 3 名は、大学写真部に所属。

- ・活動記録写真の撮影
- ・モニター参加記念 POST カードの作成
- ・フォトブック“IMAKANE”の作成
- ・コース紹介動画の作成
- ・写真による事業記録誌の作成

## (2) 今金町

総括：まちづくり推進課企画政策グループ 佐藤創

《事業実施主体》 今金町（まちづくり推進課）

《連携協力》 今金町人流創生プロジェクト協議会

今金町教育委員会・今金町保健福祉課・「ちょっと暮らし」体験者等

## 4. 調査研究スケジュール

- ①プロジェクトメンバー打合せ【6月26日】 於：札幌国際大学  
 ※メンバーの顔合わせ、実施計画及び7月実施「FW」についての打合せ
- ②第1回フィールドワーク【7月2～3日 1泊2日】 於：今金町  
 ※ツアープログラム現地調査 ※コースの選定、サインの検討
- ③第2回フィールドワーク【9月17～18日 1泊2日】 於：今金町  
 ※コースサインの設置 ※現地の最終確認・リハーサル
- ④モニターツアー【10月8～9日 1泊2日】 於：今金町  
 ※参加者は、社会人教養楽部受講者から募集する
- ⑤今金プロジェクト合同会議【12月16日】 於：札幌国際大学  
 ※事業の評価と検証、活用方策について

## 5. プロジェクトの成果と課題

### (1) 学生の学びの視点からみた成果と課題

平成 28 年度の本研究は、前年度に設計・開発した今金町における 4 つのフットパスコースの活用方策として、フットパスを取り入れた観光商品を企画し、モニターツアーによってその可能性を検証することを目的とした。しかし、この取り組み過程は、本研究に関わる学生にとっても、学内の授業では得難い実践的な学習の場であり、教育効果ももう一つの目的であった。そこで、今年度のプロジェクトを、学生の学びの視点から成果と課題を整理する。

前年度の研究課題である今金町におけるフットパスコースの設計にあたっては、観光学部観光ビジネス学科とスポーツ人間学部スポーツビジネス学科の 3 年生による共同プロジェクトとして学部・学科を超えて実施した。「フットパス」は、観光とスポーツをビジネスという共通の視点で捉えることができる恰好の課題であった。それぞれの学科の専門的学びを踏まえ、与えられた課題の解決にむけて

他学科の学生と共に行うフィールドワークや協議は、学生にとってのコミュニケーションや複眼的に思考するトレーニング機会として機能し、多くの気づきや発見を誘発することに繋がった。さらに、今金町人流創生プロジェクトメンバーや今金町役場職員が加わることにより、世代を超えたメンバーとの協議は、学内では用意することのできない環境下で、学生の学びを展開できたことも成果の一つであった。

今年度の計画にあたっては、前年度の学部・学科の壁を越えた共同の取り組みを更に発展させ、より多様な学生が参画し取り組めるように、研究課題へのアプローチの仕方については、事前に十分な検討を行った。前年度に、コース設計したフットパスを取り入れた観光商品の開発は、ツアーの企画という観光の視点のみならず、フットパスをアクティビティとするスポーツや健康の視点も重要となる。さらには、安全なフットパスのためのコースサインの作成や、ツアー参加者に今金をPRするためのツールの作成など、本学の有する学科の学びを本研究の中に可能な限り位置づけることを考慮した。最終的に、今年度の研究課題への取組に、学内での学びを最大限生かすことができると考えられる学科として、3学部4学科の学生を4つのチームに編成し取組をすすめることとした。

ツアー全体のプログラムの企画・案内しおり等の作成及び当日のモニター対応の添乗業務等については、観光学部観光ビジネス学科の学生を「ツアーチーム」として編成した。ツアー日程やプログラムの企画に必要な見学地やそこでの体験内容を選定するためには、自分の目で確認・体験するとともに、現地担当者からのヒアリングや連絡調整などが必要となる。また、当日の旅程管理や現地ガイド・接客などをトータルにシミュレーションすることも不可欠である。

フットパスコースの設営・管理や当日の準備体操・歩き方指導等については、スポーツ人間学部スポーツ指導学科・スポーツビジネス学科の学生を「指導チーム」として編成した。安全にフットパスコースを歩いてもらうためには、コースサインやその設置位置の検討及び危険個所の事前チェックと対策の検討が必要となる。また、今金町から強い要請があった町独自の「いまかね体操」の考案と実演・指導をはじめ、ノルディックポールを使ったウォーキング指導、唾液アミラーゼによるストレス度検査の運用なども検討し、実施する。

指導チームの課題にも挙げられているコースサインについては、設置位置やメッセージについては同チームで検討するが、サインのデザインと作成については、子どもの図画工作など幼児教育・保育を学ぶ人文学部心理学科子ども心理専攻の学生を「サインチーム」として編成した。指導チームと連携し、指定の設置位置に必要な情報やメッセージが一見してわかるコースサインのデザイン・作成を行った。

さらに、「写真チーム」は、本学写真クラブに所属する学生によって編成した。他のチームと比すると、同一の学部学科ではなく、メンバーは観光学部観光ビジネス学科と新文学部心理学科子ども心理専攻の学生によって構成されている。日ごろのクラブ活動における学びを生かし、ツアーに参加するモニターに配布する今金町PR用記念ポストカードや、ホームページにフットパスコースを紹介するための写真で構成される動画作成などを行った。

以上の4つのチームが、研究目的に即したミッションの具現化に向けてチームの役割について、所属学科や該当科目を担当する教員からのサポートを得ながら、日ごろの学びを積極的に生かした実践的な取り組みを展開した。チーム編成とチーム課題に関連すると考えられる学科科目例を、一覧にしたのが以下の表である。

表に示す関連すると考えられる学科科目における学習成果が、各チームにおいてどの程度活用され

【表-1】 チーム編成とチーム課題に関連すると考えられる学科科目例

研究目的	フットパスコースの活用方策として、フットパスをアクティビティとして取り入れた観光商品を企画し、モニターツアーによってその可能性を検証する				
ミッション	「秋のいまかねヘルシーツアー」の企画		安全で楽しいフットパスの運営		
役割・課題	ツアープログラムの企画 ・見学地、体験内容選定 ・見学体験、ホテル等との連絡調整 モニターへの事前連絡・資料提供 ・旅のしおりの作成 当日の旅程管理や現地ガイド・接客	モニターツアー参加記念ポストカードの作成 ホームページ用フットパスコース紹介動画の作成	コースサインの設置位置及び表示するメッセージ等の検討 フットパスコースの安全管理 唾液アミラーゼストレス度検査の運用	今金体操の考案・実演指導 ノルディックポールを使った歩き方指導 コースサインの設置位置及び表示するメッセージ等の検討	コースサインのデザイン検討及び作成
担当チーム	ツアーチーム	写真チーム	指導チーム		サインチーム
学科	観光ビジネス学科	(観光ビジネス学科) (心理学科子ども心理専攻)	スポーツビジネス学科	スポーツ指導学科	心理学科子ども心理専攻
関連する学科科目例	ホスピタリティ論 観光サービス論 北海道の観光 観光ビジネス論 国内旅行実務 添乗実務論		スポーツ傷害と予防 生涯スポーツ論 スポーツビジネス論 スポーツイベント論 地域スポーツ経営論 スポーツビジネス特講	スポーツ傷害と予防 生涯スポーツ論 人のからだと健康 地域社会と健康 運動機能と救急処置 健康運動指導演習	子どもの図画工作(基礎) 子どもの図画工作(応用)

たかについての調査は実施していないが、協議等の様子を観察する限りにおいては、授業科目名や学習した内容を例示し積極的に活用しようとする場面も少なからず散見することができた。学科の授業科目とチームの役割・課題との関連を明確に示すことは容易ではないが、日ごろの学習成果が活用されたことは十分に推察することができる。目的達成のためのミッションや課題に対して、日ごろの学びとの関連が考えられる学科の学生で組織した今回のチーム編成では、チーム内でのコミュニケーションと協議は円滑に進められたが、他チームの進捗状況や各チームの抱える問題の共有という点においては十分とは言えなかった。しかし、こうした今年度の組織体制にあっても、注目すべき動きも見られた。「サインチーム」の学生は、授業(実習)の関係から今金町で実施するフィールドワークに参加することができなかったが、「指導チーム」が撮影してきた動画による情報や綿密な打ち合わせにより、コースサインの作成をおこなった。こうしたチームの垣根を越えた連携は、サインチームと指導チームに見られたものの、他はチーム内での協議が中心となり、チームを超えた意見交換などの機会を十分に持つことはできなかった。チームを超えて議論することは、自チームの役割を全体のミッションの中で確認する機会となるともに、客観的な第三者の意見をもらう機会ともなることから、定期的な情報共有・交換の場は必要ではないかと考える。今後のプロジェクト推進には、特に重視したい点である。しかしながら、学科の学習と課題との関連を考慮しチーム編成したことは、学内では提供することのできない実践的な学習機会を提供することができ、本研究の成果の一つであると考えられる。

2012年8月に、中教審より答申された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」は、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換を求めている。本学においても、アクティブ・ラーニングによる授業「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」が展開されているが、成果とともに多くの課題も指摘されている。今年度の本研究における教育的成果が、今後ますます重視される能動的学修の展開を考える上での参考資料となることを期待

したい。

本研究に参画した学生の多くは、今金町の所在地さえも知らない状態からスタートした。しかし、訪問を重ねるにつれて今金町の魅力を各自の視点で発見し、自らの言葉で説明できるようになってきた。学生の事後レポートからは、今金町の魅力とともに、お世話になった町関係の方々への謝辞がつづられていた。そして、モニター参加者からの学生への感謝の言葉は、学生に大きな自信と次の活動への意欲を与えたものと思う。

スポーツビジネス学科 佐久間章（総括・写真チーム担当）

## (2) 地域観光振興の視点からみた成果と課題

本年度の今金プロジェクトを地域観光振興の視点から総括する。本年度で5年目を迎えた同プロジェクトは開始当初から観光による地域産業の活性化および交流人口の増加を目指して、本学と今金町との連携事業として実施されてきた。この背景には、もちろん今金町だけではなく全国の各地域を取り巻く状況がある。

平成19(2007)年に施行された「観光立国推進基本法」の基本理念の一つに、“活力に満ちた地域社会実現”がある。そして、同年に出された「観光立国推進戦略会議」の報告書には、“地域の固有の宝を生かした、個性豊かな地域づくり”が観光立国戦略の一つの柱として提起された。いずれも、21世紀に入り、観光による交流人口の増大が国の経済的・社会的発展に大きくかかわることが強調されるなか、各地域が自らの地域資源を発掘し、観光資源としての効用を活かす作業が各地で展開されている。ここで指摘された経済的・社会的発展は国という枠にとどまらず、各地域においても同時に遂げられなければならない目標となっている。観光立国の実現に関する施策は、地域における創意工夫を生かした主体的な取組みを尊重しつつ、地域の住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会の持続可能な発展を通じて国内外の観光旅行を促進することが、将来にわたる豊かな国民生活の実現のために特に重要であるという認識のもとに講じられなければならない。このことに関連して、石森秀三氏(2007)の以下の論説は非常に示唆に富むものである。つまり、「観光客や旅行会社や観光関連企業や名所見物が主役の「従来型観光」の振興だけでなく、地域住民が主役となり、地域住民が誇りを持つことのできる地域資源を持続可能な形で観光者に提供できることによって、地域住民と観光者の双方が感動や幸せを共有できるとともに、地域活性化に貢献できる「新しい観光の創造」をおこなうことが不可欠である。」(石森秀三、2007、「序文 観光による地域再生のためのバイブル」、堀川紀年『日本を変える観光力：地域再生への道を探る』p. ii) というものである。

上記の視点から、今年度の今金プロジェクトの成果と課題を整理してみよう。

### ①地域資源から観光資源へ

昨年度に開発したフットパスの活用方策を具体的に検証するのが今回の研究の主たる目的であった。フットパスの開発によって、地域において身近でさまざまな地域資源が、癒し、健康づくり、自然・環境保護などの価値を付加されることで、魅力ある観光資源となる可能性があることを確認できた。もともと地域資源は、観光行動のさまざまなプロセスと密接に関係するうえ、関係する主体が多岐にわたる。そのため、観光に向けた地域資源の開発を進め、多くの観光客による利用が実現すれば、地域経済に対する波及が期待される。地域資源の開発にあたっては、個別の主体が個別の地域資源を取り扱うのではなく、個別の主体が連携して、地域資源を一体となって開発し、連携させることが求め

られる。同プロジェクトは町と本学との連携で行われたが、役場職員を中心とした地域の主体的な取り組みなくして当初の目標を達成することはできなかった。特に、今回のフットパスの開発過程においてはなおさらである。

地域資源を活かした観光振興は、地域経済に対してさまざまなプラスの影響をもたらすことが期待されるが、その実現は容易ではない。なぜなら、どのような地域資源が観光客にとって魅力あるものなのかが不明であるうえ、一般の商品やサービスと異なり、地域資源は「その土地にしかないもの」であるため、常に提供できるとは限らないからである。今後、マーケティングの技法などビジネスの視点を生かした取組みが一層求められる。他地域では「歴史・文化」や「自然・天然資源」、「食」にあてはまらない地域資源についても、観光における活用が進んでいる。たとえば、農家や漁家における民泊の商品化や、道の駅などの農産物直販所で実施されている加工品などの販売である。今金町の場合は、今後の検討すべき課題である。観光振興とは地域の個性や持ち味を伸ばし、魅力づくりを行うプロセスにほかならない。地域を基盤として成立し、地域づくりと密接に関係する観光形態をとるためには、新たな施設設備が原則として不要で、既存の地域資源を活用しつつ、知恵と工夫のソフト面で集客に当ることや企画・運営を自治体や、住民、NPO、地元観光事業者などを受入地域（到着地）側の主導で行うこと、そして保護・保全と利活用の調和がとれ、持続可能な観光をめざす環境共生型であることが不可欠となる。今金町の場合にはこうした体制づくり、組織づくりも課題の一つである。

## ②フットパスを活用したモニターツアーの実施

今年度は昨年度開発した下記の2つのフットパス・コースを利用したツアーを造成・実施した。モニターツアーは、平成28年10月8～9日に実施された。ツアーの概要についてはすでに述べてあるので、ここでは事後アンケートの結果を紹介し、成果と課題について言及する。

### 〈ふれあいコース〉

全長約 6.6 km 所要時間約 1 時間 30 分

神丘墓地～今金町開拓発祥の地～インマヌエル教会～利別大橋～狩場山を望むビューポイント  
豊かな田園風景を楽しみながら今金町の歴史を学び、町の成り立ちを知ることができるコース

### 〈くもかぜコース〉

全長約 7.6 km 所要時間約 2 時間 30 分

デ・モーレンいまかね～総合公園～あったからんど～光大橋～3・4・5 南通り～後志利別川河川敷  
市街地を中心としたコースで、途中にはさまざまな施設があり飲食や休憩をとりながら風景も楽しむことができるコース

神谷由紀子氏（2014）の『フットパスによるまちづくり』を参考にし、フットパスについて簡単に整理しておこう。

フットパスは、地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことのできる小径をいう。一見資源がないように見える地域でもいい感性さえあればフットパスはできるとされる。フットパスはその地域がどんなまちなのか、景色、文化、歴史、生活すべてを体で感じ取ることである。つまり、心象風景のような心に残る景観をつないでコースにすることが大切なのである。名所旧跡も、観光として訪れるよりも、周囲の景観や歴史とあいまって印象の強い新鮮な体験として忘れられない旅にな

る。また、フットパスは歩く人を楽しくさせるだけでなく地元の人々をも地域の魅力と誇りに目覚めさせ、両者を一緒にまちづくりに引き込む力を持っている。この点はまさに前述の地域資源を観光資源にする過程で確認されたことである。

さらに、神谷氏はフットパスがまちづくりに強くかかわることについて論説しているが、“まちづくり資源の発見”や“プラットフォームの形成”については今回のプロジェクトを通して検証された。つまり、町の成り立ちや性格、そして魅力が浮き彫りになり、本学学生やモニターツアー参加者との交流を通して町民の間に外からの人たちを受け入れる態勢ができ、逆に自らが住む町に対する愛着を醸成する契機となったことが成果として挙げられる。

今回のプロジェクトではフットパスを主要なメニューとしたモニターツアーを実施したが、この企画はフットパスが観光として有効かどうかを見極めたいとする企図によるものであった。このことに関連して、フットパスと観光は異なるという見方について触れる必要がある。この見解には、観光が市場経済からの発想であるのに対し、フットパスは地方自治からの発想であること、そして、観光は人間の快樂の部分の楽しみ、フットパスは人間の精神的な部分の楽しみであることがその根底にある。しかし、一方、観光は経済的な効果と社会的な効果を併せ持つとする考え方もあり、これまで述べてきたようにフットパスも2つの側面をもっていると捉えることができる。ただし、「フットパスが地元のガイドがボランティアで案内する観光の一つと思われるであろう。まちづくりとの関係でも、人を集める観光の一つとしてしかフットパスを捉えていない。これではフットパスから何も生まれない。」(p.185)とする点や「フットパスと観光は絶対違う。フットパスによって後に観光ができてくることはあるけれど、フットパス＝観光ではない。」(p.186)という神谷氏の指摘は観光によるまちづくりを推進していく者として肝に銘じておくべきである。

最後に、モニターツアーの事後アンケート結果（後添、資料）からフットパスの活用について考慮すべき点を概述する。

昨年10月に実施されたフットパスを中心としたツアーには14名の参加があった。ツアー全体としては概ね好意的な評価であったが、特に、初日の「旧石器文化館・資料館」や「じゃがいも選果場、「農業体験（トマト、シイタケ収穫）」「夕食・散策」に対する満足度が高く、期待度をかなり上回った。「フットパス」は2日目に行われたせいも、また、町が主催するイベントの一つとして行われたことによるものなのか、満足度はそれほど高くはなかった。町の郊外をルートとしたコースに対する評価が思ったほどではなかったことから、天候が良くなかったせいも考えられる。

「フットパス」自体についての満足度は、“くもかぜコース”、“ふれあいコースのいずれも6割以上の参加者が満足したと答えており、“ふれあいコース”に参加した人の約3割が大変満足したと答えている。フットパスの本質とも言える、景観を楽しむことや地域の人たちとの交流については、アンケートの自由記述欄にある“町内の人たちとのふれあいが良かった”“清潔で穏やかな町のイメージをもった”などの回答から一定の成果があったものと推察できる。一方、“距離の表示がもっとほしい”“立ち寄りたいがお店が開いていない”“お土産を買う場所がなかった”などから今後の課題がうかがわれる。いずれにしても、フットパスを今回のようにパッケージツアーとして盛り込むことには、天候などの外的条件の問題がある。フットパスを楽しむ立場から言えば、“行きたいときに行く”ことを可能にするために、着地型観光の対応が必要である。つまり、現地でいつでも対応できる仕組みをつくることである。

観光ビジネス学科 丹治和典 / 千葉里美（ツアーチーム担当）

### (3) 今金フットパスコースの活用方策と指導チームの活動を振り返って

#### ①より多くの人に活用されるコースとなるために

今年度、検証したフットパスコースは、田園フットパスコース（約 8.5Km、2 時間）、くもかぜコース（約 7.6Km、2 時間 30 分）、ふれあいコース（約 6.6Km、1 時間 3.分）、ショートフットパスコース（約 4.6Km、2 時間）の 4 コースである。いずれのコースも歩くための所要時間は、2 時間前後必要となる。実際に歩いてみると魅力のあるコースであることは、十分に体感できるが、2 時間という所要時間は、半日の日程が確保されているイベントなどでなければ、コースの体験そのものが難しいと言わざるを得ない。そこで、この魅力あるコースを、多くの人により気軽に活用できるようにするためには、各コースに 30 分程度で完歩できるショートバージョンのコースを複数パターン用意することが必要ではないかと考える。

たとえば、ふれあいコースであれば、スタート地点から総合運動公園内を巡るのは「アップダウン健康コース」、光大橋と旧国鉄用地を巡るのは「絶景ポイントコース」、また、あったかランドでの温泉や食事を楽しむことをフットパスコースの一部として取り入れた「ゆったり満腹コース」なども考えられる。短時間でも気軽に体験でき、数回に分けてコース全体を歩くことも可能となる。

さらに、くもかぜコースの神丘墓地やインマヌエル教会などは、実際に訪れることによってその魅力を体感できる必見の場所がある。歩くことを目的としたフットパスコースではあるが、あえて時間のない人には「車で巡っても十分楽しめます」などのキャッチコピーで、今金町の歴史や魅力を伝えることができれば、「次は歩いてみようか」とリピーターになってくれることも期待できる。

このように、既存コースをバラエティに富んだショートコースで分割することによって、子どもから高齢者まで、だれもが気軽に体験ができる「今金フットパスコース」となるのではないかと思う。

#### ②学内での打ち合わせの充実が成果に繋がった

今年度は、指導チームとして教員 2 名（男女各 1 名）、学生 10 名（男女各 5 名）の 12 名体制で、「フットパスコースの確認及び当日の指導」、「サイン及び設置場所の選定、設置」、「今金健康体操の提案及び当日の指導」「ストレスチェックの実施及び分析」の 4 つの役割を担当した。2 回の事前現地踏査をはじめ学内においても他チームと情報を共有しながら準備を進め、当日の指導に至った。

7 月に行った 1 回目の事前踏査は、あいにくの悪天候であったが、ビデオを活用し詳細に記録することができたので、当日参加できなかった学生やサインチームの学生・教員にも現地や事前踏査の状況を知らせることができ、理解を深めることができた。

その後、9 月に行った 2 回目の事前踏査では、サインチームから提示された原案を持参し、モニターツアーと同じ日程で実際にサインの設置・確認・撤去を行った。その際に、コースサインのデザインやメッセージなどの改善すべき点の確認を行った。大学に戻り、再度サインチームへ修正内容の提供と調整を行い、最終的なコースサインの決定に至った。

また、今金体操については、過去の映像を参考に、学生自らが考案した簡単な体操を、学内において繰り返し練習し、2 回目の事前踏査の際に実演するとともに、ステージでの立ち位置や、実際に参加する町民への指導法などを確認した。唾液アミラーゼによるストレスチェックも行ったが、当日の参加者の流れが把握できないため、不安要素を残すこととなった。

10月に実施したモニターツアーの「健康まつり」の健康体操に関しては、初めて参加する学生スタッフもいたものの学内での何度も練習を重ねた成果によって、たいへん好評であった。フットパスについては、心配された天候も終了間際まで持ちこたえ、参加者の満足度も高い結果となった。サインそのものについては問題なかったものの、事前にサインの説明がなかったことや、一部の設置場所などに課題を残した。ストレスチェックはエラーが続出し、被験者が少なかつた割には、一定の効果を上げることができた。今年度の指導チームは、2回の事前踏査とモニターツアー当日でメンバーを固定することができなかつたが、学内での打ち合わせを充実させることにより、最終的に多くの成果を残す良い結果につなげることができた。学生からの無理な提案も多々あつたが、今金町担当の佐藤さんをはじめ、笑顔で対応していただいた今金町の関係者に深く感謝し総括とする。

スポーツ指導学科 新井貢 / 非常勤講師（健康運動指導士）本多理紗（指導チーム担当）